



第188號 (第 17 卷)

(昭和11年) 12 月 號

忘れられない 1936 年

(卷 頭)

まことに忙しかつた昭和11年が今や終りに近づかんとしてゐる。この年の最大行事は6月19日の皆既日食であり、又、同時に、15年ぶりに吾々を喜ばす珍象は土星の輪の消失であると、かねがね待ちつゝあつた年ではあつたが、今、ふり返つて見ると、この豫期された二大現象ばかりでなく、全く意外に三つの新彗星と四つの新恆星が現はれて、永久に吾等をしの此の年を忘れられないものとした。即ち、

5月16日	ペルテヤ彗星の發見	(米 國)
6月18日	五味氏、とかげ座新星を發見	(日 本)
7月17日	下保彗星の發見	(日 本)
9月18日	タム氏、鷲座第1號新星を發見	(スエーデン)
9月20日	ジャクソン彗星の發見	(南アフリカ)
10月 4日	岡林氏、射手座新星を發見	(日 本)
10月17日	タム氏、鷲座第2號新星を發見	(スエーデン)

こうした輝やかな記録に於いて、我が日本人の名が三つも出てゐるといふ事實は、オリンピックの優勝者の榮譽にもまさつて、學界を飾るものといつて良からう。

此のほか、日食の機縁により、20數名の天文家が歐米各國から來朝したこと、花山に80センチ口径の又型カセグレン反射鏡が到着したこと等は、特に我が日本の天文學界に特筆すべくことであらう。尙吾が黨の諸士の協力によつて、“圖説天文學”が發刊せられるに至つたことも、全く前例の無いこととして、1936年を賑はすものであらう。(11)